「キリスト教主義大学の意味と使命」

船　本　弘　毅

I　教育の本質と目標

教育とは、本来何であり、何を目指すのであろうか。

教育の行なわれる場として、学校が占める位置は大きいが、歴史的に考えれば学校は次のような特質を持っていたと言うことができるであろう。すなわち、古代ヨーロッパにおいては、学校は宇宙にみちわたる普遍的諸法則を人間の理性によって認識し、その壮麗さにみとれる瞑想的生活を教える場であった。

中世前期には、修道院付属学校にみられるように、貞潔と清貧と服従を守って、主イエス・キリストにならい神の僕としてこの世に奉仕する聖職者を養成する場であった。

中世後期には、自然科学によって解明される自然現象の微妙さにうたれ、そこに見られる自然法則を用いて人間の生活環境をより能率よく整えて行く近代的技術を教え始めた場が学校であった。

現代は、平等な権利を主張するすべての個人が、他者と競争して、よりよき社会的地位を求めて戦いあう修羅場になっている[1]。

さらにこの自由競争の原理は個人のレベルを越え、国家と国家との自由競争にまでおよび、学校はそのための戦闘員の養成所として利用され、その研究成果は直ちに大量殺戮兵器を産み出すことにも応用されてきているのである。

近代西欧文化が、「神の見えざる手」を振り切って「人類進歩の観念」を高ら

1）小林政吉　「競争の原理と奉仕の原理—現代の教育状況とキリスト教の教育—」『転換期に立つキリスト教大学』1－2頁参照。

かに謳いあげるようになった時、それは人間にとっての「有効性」がひたすらに求められる文化になっていったのであった。そしてこの「有効性」を追い求めるいわゆる「科学主義」「技術主義」(Technocracy) の文化は、必然的に「業績主義」「能力主義」(Meritocracy) の文化を産み出さざるを得なくなったのである。

かくして現代の教育はこのようなテクノクラシー・メリトクラシー社会に規定された教育とならざるを得なくなり、そこでは個人の尊厳、人格の完成、人間性と云った側面は脇に追いやられざるを得なくなったと言えるであろう。そこでは、学校成績の良い者が社会の支配権をにぎるエリートになり、高度の専門的知識と技術を身につけた人々は、自分の利益だけを求めて多くの人々を傷つけるに至る反社会的行為や家庭の人間関係の崩壊などを産み出して行くことになった。このことは本来「人生の道具」であるべき高度の専門的知識や技能、あるいは高い社会的地位や財産といったものを多く所有することが、そのままで優れた人生であると考えられたり、それによって理想の社会や人間関係を築きあげることができるといった幻想を生み出したのであった。

ギリシャ語の真理をあらわす語はアレーセイア (ἀλήθεια) であるが、これは否定の接頭語 a と、おおわれたもの letheia という語から成立している。すなわち、「真理」とは覆われていたものが覆いを取り除かれること、あるいは、おおいを取られると正確に見えるようになる事物の真相を意味している。「おおい」とは、この場合、人間の衝動的な欲望によって動かされる独りよがりな判断のことであり、それから解放された理性によって冷静に事物を眺める時、その事物の真相がそこに表れ、見えて来ることを意味したのである。

聖書がこの語 ἀλήθεια を用いる時には、「我と汝」という実存と実存の間の真実、誠実、信頼の関係をあらわすものとして用いられている。

教育を意味する英語 education は、「引き出す」という意味のラテン語 educatio から来ており、 本来学習者が内に持っていた可能性を引き出すことが教育であると考えられて来た。周知の如く、プラトンの『対話篇』の中にあらわれるソクラテスの「助産術」の概念を援用することによって、この考え方は補

強されたのであった。

しかし educatio は「引き出す」ではなく、中部ドイツの ziehen に関わり「養育する」「育てあげる」という意味であったということをヨーロッパ教育史の研究者たちは指摘している。「引き出す」と理解するのは、近代的概念をはるか以前の語源に読み込もうとしたものであり、本来は「育てる」という意味であったとするのである。

さらに educatio は家庭生活と家族への伝統の成果を指していると言われる。ローマの教育は決して知識の教授のみではなく、家庭における教育を通して、生活・礼儀・宗教・職業・軍事的な事柄に至るまで、いわば生の全領域に及ぶものであり、そのため母親や父親、特に父親の責任と権威は大きいものがあった。

ラテン語の educatio はローマのヘレニストであるキケロによるギリシャ語 *παιδεία* の多くの訳語の一つである[2)]。パイデイアは子どもの養育という意味で多く使用され、子どもが必要な体験や服従をしながら、人間として成長して行く過程とその成果を示す言葉であった。そしてこのパイデイアの主体を、プラトンは「人間を超えた者のわざ」であると考えている。聖書に「父たる者よ、子どもをおこらせないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい」[3)]と言う勧めがなされているが、これは *παιδεία καί νουθεσία κμρίομ* であり、この場合の「薫陶と訓戒」は修辞学的な二分法であり、両者を一つにして *παιδεία* と見ることも可能である。そして主のパイデイアとは、その主体が *κμριος*（主）であり、主がなしたもう *παιδεία*、そして人間はこの主の *παιδεία* に参与する共働者として、それぞれがゆだねられた子どもを育てるのである。

すなわち教育は、本来人間の技術の世界に属するものではなく、また人間の手の中にあるものと考えるべきでもなく、人間の教育にかかわる働きは、厳しく自覚されるべき限界を持ち、主のパイデイアへの参与の働きとして受けとめ

2) 湯木洋一「Educatio–Paideia——キリスト教教育のための試論（6）——」『神学研究』第 27 号、p 108 以下参照。
3) エペソ人への手紙 6 章 4 節

られなければならないのである。

さらに第二に、プラトンはパイデイアの意義として、転向の術、魂の回心の術、ということを述べている。すなわち彼は、教育の目標に言及するのである。それは現代の教育が捕われている有効性や能力主義に向うものではなく、むしろ技術的知識や能力に対して、正しい位置づけを与えることを問題とし、人間を人間たらしめる根拠、その基底を自からたずね、また被教育者をこの根拠を問う者へとうながしつつ、人間として共に生きることを目指す教育的努力が必要であることを説くのである。彼が「魂の回転の術」という時、それはこのような教育的任務を示唆していると考えられる。

したがって、教育とは本来、人間を人間として育てる働きである。そして人間が人間として育つと言う事は、知識や技術を身につけた有能な人物を作りあげることを最高の目標とすることではなく、自からがこの世界の中に存在し、生きることの根拠と意味に目を向け、かくあらしめる超越者を問うことの中で明かにされる根拠に立って生きる者を目指して、人間が育てあげられるということである。このような生の真実な根拠に基づいて、人間の尊厳性に目覚め、他者の尊厳性をも見失うことのない生き方をなす者として、すなわち人間が真に人格として育てられることこそ、本来、教育の働きなのである。

このように教育をとらえる時、主のわざに参与することをゆるされている者としての教育者、すなわち教育の業に携わる者として召されている者には、厳しさと謙虚さとが絶えず求められるであろう。そこでは教育を人間の自己目的の手段として利用することは許されないのである。

II　聖書における教育思想

言うまでもなく、聖書は今から二、三千年前に書かれた古い書物であり、当時今日のような教育制度や学校があったわけではない。しかし聖書の中には、教育の問題を考える時に鍵になる重要な思想を見出すことができるであろう。

a）　旧約聖書における教育思想

旧約聖書においては、両親の教育における責任が重視されている。

「主を恐れることは知識のはじめである
　愚かな者は知恵と教訓を軽んじる
　わが子よ、あなたは父の教訓を聞き
　母の教を捨ててはならない」（箴言１：７－８）

イスラエルでは、最初の教育的責任は母親の務めであった。特に乳児期は母親の責任であり、日常生活の具体的な教えが母親によってなされ、子供は母親の感化を受けて成長した。

しかしまた家長としての父親は、教育においても重い責任を担っていた。子供が成長し自覚的に生きるようになると、父親は先づ子供に具体的な技術教育をほどこす務めがあった。その領域は牧蓄、農業、手工業から、さらに祭司や土師といった民族の指導者養成にまで及んだと考えられる。やがてイスラエルの国家が形成され、王の継承者や役人を養成する必要が生じて来ると賢人と呼ばれる教師が、宮廷を中心としたいわゆる学校教育を始めるようになるが、それでも家庭、すなわち父の家が教育の基礎をなす場であったことは変らなかった。さらに注目すべき点は、父親は単に技術の伝達に留まらず、教育の営みを通して子供たちを生命と平安に導く重大な責務を負わされていたことである。父親にはその子供たちに対して、世界観や信抑について語り、伝達する任務が課せられていたのであった。

アブラハムに始まるイスラエルの歴史は、神の御手の働きによるものであると信じられていた。すなわち、イスラエル史は神の救済史と重なり合って展開していると信じられたのである。そしてイスラエルでは、この救済史の事実が父と子の対話において取り上げられ、問答がくり返される中で精神教育がなされていったのである。祭やさまざまな伝統的慣習も、それを守ることによって子供たちに「なぜ」という疑問を生じさせ、それを手掛りにして主のみ業を語り、教えることが目的であった。

旧約聖書における教育の目標は、したがって、第一に正しい知恵を与え、第二に真の生命と平安と幸福とを与えることであった。この場合、知恵とはギリシャ的な知性、理性とは異なり、もっと深く人間の生きる正しい道、あるいは人間の人格に関わることとして考えてられていたところに、旧約聖書の教育思想の特色を見出すことができるであろう。

b）　新約聖書における教育思想

イエスは彼に従う人々に対して、神の創造的ミッションの業に共に参加することを求められた。

> 「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」（マタイ28：19-20）

ここでは「弟子となし」という命令が、内容的には「バプテスマを施す」こと、「教育を行う」こと、と具体的に言い表わされており、ここに当時の教会の教育的志向性を読み取ることができるであろう。

福音書はイエスが子どもたちを愛し、祝福されたことを記している。イエスは人々に対し「幼な子のようになること」を勧め、「幼な子を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」と語っているが、これは人間が幼稚になることではなく、人間が成熟し、成人して行く過程の中で、父に対する子の関係を絶えず回復し、更新することが求められているのであり、ここでも教育は神との関係で捉えられているところに、聖書の教育思想の特色があると言える。

キリスト教は2000年に及ぶ長い歴史の中で、伝道、奉仕、教育を互に深く関係し合い、結合したものとして受けとめ、教会はこのゆだねられた務に励みつつ、神ご自身のこの世界に対する働きの業に参与すべく召されていると理解し、歩んで来たのである。

Ⅲ　キリスト教学校の位置づけ

日本におけるキリスト教の歴史において、キリスト教学校の果たした役割は大きいものがあり、特にプロテスタントのキリスト教史は、ミッション・スクールの存在をぬきにしては語り得ないと言っても過言ではない。

日本では1859年をプロテスタント宣教開始の年としているが、この年には米国監督派教会宣教師のJ. リギンス、C.M. ウィリアムス、米国長老派教会宣教師のJ.C. ヘボン、米国改革派教会宣教師のS.R. ブラウン、D.B. シモンズ、米国オランダ改革派教会宣教師のC.F. フルベッキなどが相次いで来日している。

一方、日本におけるキリスト教学校の中で最も古いのはフェリス女学院と女子学院であるが、共に1870年に創立されている。すなわち、最初の宣教師の来日後、わずか11年のちには、いわゆるミッション・スクールが設立されたのであった。そこには日本人は知的な人間であり、知的欲求の強い優秀な民族であるから、日本伝道は教育を通してなされるのが有効であり、効果的であるとする初期の宣教師たちの判断があったことは明かであり、これは他国における外国伝道とは違った日本における独特な外国伝道の型を産み出したと思われる。

しかしこのような見解の中には、伝道を主とする考えが根底をなしており、教育はしたがつて伝道のために仕える業であり、手段に過ぎないという考え方がある。それはまさに狭義のミッションのためのスクールがミッション・スクールであると解されていたのである。

またキリスト教教育はピューリタンの厳格な生活姿勢と給合して、いわゆる禁欲的プロテスタンティズムを産み出した。かくしてミッション・スクールの生徒は、女子の場合はよく躾けられた良家の子女であり、貞操観念がしっかりした真面目な生徒、男子の場合は誠実で質実剛健、禁酒禁煙を守る者、といったクリスチャン・イメージが定着するようになった。このような道徳観、倫理観が日本の社会で受け入れられ、大きな役割を果たしたことは客観的に認められねばならないであろう。

キリスト教学校はこのようにしてスタートしたのであり、その目的は第一

に、良い生徒、つまり真面目な人間を造り出すこと、第二に、クリスチャンを造り出すこと、と考えられたのは自然の成行きであった。そして教育によってクリスチャンを産み出そうとする考えは、教育は福音に代るもの、信仰的回心に代って教育がキリスト者を形成し得るという考え方を作り出して来たのであった。学校の古い資料にあたってみると、ミッション・ボードに提出された年度報告の中で最重要項目の一つは、その年の受洗者数であり、受洗者数は教育の成果を評価する大切な基準となっていたのである。

しかし本来、キリスト教教育とはそのようなものであろうか。キリスト教の歴史、教会の成立の歴史を振り返って見ると、その成立の当初から、福音の宣教、教育の営み、奉仕の業、といったことが相互に密接に関連し合うものとして重んじられて来たことは明かである。福音は、説教において講壇から語られると共に、奉仕の業を通して証しされ、また教えられて来たのであり、教育は単に宣教に付随するものと考えられるべきではないと言える。

パウロはその手紙の中で[4]、教会の職務に触れ、使徒・預言者・教師・力ある業を行う者、などが立てられたと述べているが、彼らはそれぞれイエスに従い、神のミッションに生きた証人の群れであり、その意味では教会は成立当初からミッション共同体であったと言うことができる。

ヨハネ福音書は、復活の主が自からを弟子たちに顕わした後に、「安かれ、父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」(20：21) と、派遣の命令を与えられたことを記しているが、このイエスの命令と委託に応えてイエスの働きを継承するためにこの世に向けて押し出され、遣わされて行ったのが使徒であり、伝道者たちであった。そして彼らにとってそのミッションの自覚は、単に外からの社会的・国家的要請や、あるいは彼らの内なる宗教的熱心や衝動によってではなく、いわば上からの福音による召しと、それによる彼ら自身の主体の変革という出来事に根ざしていたのである。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ

4) コリント人への第一の手紙 12：28－30 参照。

のである。そしてあなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためである」（ヨハネ15：16）

したがって教育の業は、キリストを通して働きかけられる神のみ業に積極的に参与する宣教の業であると規定することができる。

このように教育の営みを理解する時、キリスト教教育の真の主体は神であり、それぞれの学校は設立の動機や場所や時期を異にしながらも、真の設立者・創立者は根源的には、人間を招き、愛したもう神ご自身であるということができるであろう。そして人間のなす教育の業、また人間が作り出す教育の施設は、その神に仕え、神の委託に応えるために用いられる道具に過ぎないとも言えるのである。

言うまでもなく、キリスト教学校は学校としての機能役割を充分に果たしていかねばならない。この事を今日の時代の中で無視することはできない。しかもその学校で働く一人ひとりにキリスト教学校の建学の精神が不断の問いかけとして迫って来るのである。この緊張関係がキリスト教学校の中では、いつも生きていなければならないのではないであろうか。いわば学校的性格と教会的性格を合わせ持ちつつ、この二つが支配とか従属の関係ではなく、また単なる相互関係でもなく、共に協力し、正しい緊張関係に立つ中で、キリスト教学校の働きは全うされるのだと言うことができるであろう。あえて言えば、キリスト教が軽視され、無視される時には、学校を閉じる覚悟を基底に明確に持ちつつ、狭き道をたどり行かねばならないであろう。そして抽象的な意味でではなく、真実に「主よ導きたまえ」という祈りなしには、キリスト教学校の今日における歩みはあり得ないであろう。

Ⅳ　キリスト教大学の使命と課題

1988年度中に全国の公私立高校を中退した者の数は11万６千人に達し、過去最高を記録した。大阪の島之内教会に設けられた「自殺防止センター」という電話による相談所にかけられて来る電話の65パーセントは10代20代の若者であ

り、内容的には教育に関わる問題が43パーセントを越えるという。教育の担う役割の大きさを思わずにはいられない。キリスト教学校は今日まで日本の教育界においてさまざまな貢献をなして来た。女子教育において、英語教育において、あるいは国際教育、人格教育において大きな働きをなしたことは広く認められるであろう。

今日、混迷する教育界において、臨教審などが、有用な人材の形成、今日の科学技術の進展に貢献する教育、国家に仕える教育といった方向を打ち出す現実の中で、キリスト教教育はその長年に及ぶ歴史の中で変らず訴え続けて来た神の前に生かされているひとりの人間としての成長、真の人間形成にかかわって行く人格教育を目指す教育としての存在理由が、あらため問われていると言えるであろう。

大学の歴史を辿ってみると、大学が大学である条件にはアカデミック、フリーダムを欠かすことはできないことは明かである。したがってキリスト教がキリスト教大学において一つのイデオロギーとしての規制原理としてのみ働くとすれば、キリスト教大学は矛盾に陥入らざるを得ないであろう。しかしキリスト教はそのような意味での世界観、またイデオロギーではなく、むしろ福音はそれらに否定媒介的にかかわるものである。キリスト教は真理や文化に対し、その限界を指示し、その相対性を自覚させ、しかもその相対性の中における人間の営みを力づけ励ますものであると言える。

キリスト教大学のなすべき使命と課題について、いくつかの事を具体的に考えてみたい。

a）　新しい真人の形成

キリスト教教育は、すでに述べたように、回心者を得るための伝道の手段ではない。単にクリスチャンの数を増やすことを目指すのではなく、新しい真人の形成が目標でなければならない。すなわち本来的な意味におけるキリスト信仰に真実に生きる人間の形成が求められるのである。

福音の原語はユーアンゲリオンであるが、これは元々良き音信の意味であ

り、それは聞いて受け入れ従う人間を、キリストにあって新しく造り変え、神との関係を回復し、新しい人間として生かす使信である。福音は神から人間へのAnrede、語りかけであり、人間の理性や技術・科学の手離しの讃美ではなく、個々の人間を真実に問題にし、人間の罪と弱さを真実に問題にするのである。その意味で現代の知識偏重、学歴社会、人間至上主義といった風潮にプロテストする教育である。

b）　生命尊重の教育

現代の深刻な、まさに根源的な社会問題は生命の軽視ということにある。キリスト教教育はこうした傾向に対し積極的に発言すべきである。

聖者の中で「生命」を示す語は、㋑生きるという動詞と㋺魂という名詞から来ている。そして「わたし」を強調する時には、わたしの魂と表現した。生命と魂を同義語としてとらえているのは興味深い。

旧約聖書は、人間は本来Imago Dei、神の像を持つ存在であり、その生命は神の賜物であると考えている。それゆえに、生命は尊重されねばならず、人の生命を害ねることは悪であると考えられたのであった。十戒は「汝、殺すなかれ」と殺人を禁止している。しかし旧約聖書には「死んではならない」という戒めはない。旧約聖書には自刃したサウル王[5]やクーデーターに失敗して焼身自殺したジムリ[6]など、いわゆる自殺者の記事が出て来るが、自殺行為そのものが責められているのではなく、それが罪の結果であり、そこまで追いこまれて行ったことが悲劇であり、神の罰であると考えられているのである。

旧約聖書では人間にとって、生きるということの大切さは自明のことであり、生きることは恵みであり、務めでもあった。したがって「死ぬな」という戒めは、あえて規定する必要が認められなかったのである。

新約聖書では、イエスは殺すなということを命じるだけではなく、憎しみ、

5）サムエル記上31：4－5参照
6）列王紀上16：18参照

敵意も禁じられた[7]。イエスは他者の生を妨げることを禁じ、すべての物を得ても自分の生命を損したら何の益があろうかと問われたのである。それは死んだら終まいだというような事ではなく、あなたの生命、あなたという一人の人間の存在は、他の何物とも、如何なる持ち物や財産とも、否、全世界とも、とり代えることのできない、かけがえのない尊いものである、と言われたのである。そしてイエスは、そのわたしたちのために十字架にかかり、わたしたちにそのようなかけがえのない者として生かされているのだから、精一杯生きよ、と勧められたのであった。

パウロは生きることはイエス・キリストにおいて生きることであり、その生は主の恵みへの応答の生であると述べている。

キリスト教教育は、この生命の持つ深い意味を、この時代の中で明確にする使命と課題を担っているのである。

c） 感動ある人生への教育

人はしばしば他人と自分を比較し、優劣を競い合って生きている。すでに述べたように近代西欧文化が、見えざる神の御手を振り切って人間の力により頼む道を歩み始めた時、有効性、有用性が人生の価値基準となり、競争の社会を産み出さざるを得なかった。

しかし聖書は何よりも、人間が生きていることそれ自体が大切なことであり、意味あることであり、一人の人間の存在はかけがえのない重さと意味を持つことを主張する。あえて言うならば、その人間が如何なる生活をし、どのような業績をあげ、何を所持し、如何なる地位についたか、あるいは将来にどのような可能性を秘めているか、というような事よりも、今、ここに、生きていることを大切にし、尊いことであるとするのである。

聖書は言うまでもなく、人間を手離しで謳歌するのではない。人間は誰もがやがて死を迎えねばならない、はかない有限な存在であり、弱く罪深い者であり、小さなことに一喜一憂するつまらない存在であることを知りつつ、なお、

7）マタイによる福音書5：22参照

ひとりびとりが神の愛と赦しの中に生かされている者として、その存在に深い意味を見出すのである。

パウロは「土の器」という印象的な表現を用いることによって、その関係を言いあらわしている。

「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである[8)]」

豊かさの中で、反って無気力、無感動な生き方が広がり、精神的な貧しさが指摘される現代生活の中で、キリスト教教育は、生きる意味を見出して生きる人間教育という点において使命と責任を持つのである。

d）　社会変革の力を与える教育

キリスト教教育は、人間の問題と深く関わる教育である。それは人間の内面に深く関わると同時に、平和や社会の問題と関わる。福音は平和の福音であり、和解の福音であるゆえに、社会における人間の問題とかかわるのである。したがって、キリスト教教育は現代社会に適合、順応し、そのことによって結果的には社会的不公平や差別、不義を増長させるのではなく、社会の問題と責任をもって取り組み、社会の変革の力となる人間の形成に参与するものでなければならない。福音は人間と世界を変革し、新しくする力を持つものであり、福音に基づくキリスト教教育は、社会の変革にかかわるものである。

e）　聖書に基づく教育

このように人間を内から励まし、力づけ、権力に屈せず、たじろぐことなく生きる生へと押し出す力を、キリスト教教育はどこから得ようとするのであろうか。

それは端的に言えば、神の言であり、その神の言が説かれ、語られる教会で

8）コリント人への第一の手紙４：７参照

あろう。イスラエルでは、究極的な教育者は神であると信じられていた。キリスト教教育は現代においても、神の言に導かれ、支えられて、始めて可能になるものである。

キリスト教教育はその歴史においてそうであったように、絶えず聖書に立ち帰り、聖書に立脚して行なわれねばならないであろう。その時、キリスト教教育は人々を福音との出会いへと導き、人間を真実に解放し、生かす力となるであろう。

したがってキリスト教教育に携わる者は、聖書の言に聞き、導かれ、支えられて、その業に取り組むことが求められるであろう。自己の無力さ、技術の不足、そして何より愛の不足を覚えつつも、主に用いられ、主にゆだねて歩むのであり、キリスト教教育はそれに携わる者が、常に礼拝を共にし、祈りつつなされるところにその特色を持つのである。真理の前に謙虚であり、ゆだねられた学生の前に謙虚であり、何よりも神の前に謙虚であることが求められ、また召されて教育の業に携わる光栄を感謝しつつ、積極的に応答の歩みをなすことが求められるのである。

エーリヒ・フロムは『希望の革命』の中で「まだ生まれぬものの真実性を信ずるものにとっては、ノアの箱舟に帰ってきたハトがくわえた一枚のオリーブの葉も洪水の終わりを告げるしるしとなる」[9] と記している。

教育創造の仕事は、そのような一つの希望のしるしのようなものであろう。教育の営みは、外見的には全く取るに足りないものであるかも知れない。それは文字通り、一片のオリーブの葉にすぎないであろう。しかしハトのくわえる一片のオリーブの葉にすぎないような教育の営みであっても、それは未来の希望をシンボライズすることをやめないのではないか。そしてこの希望をもって教育の業に携わることをゆるされているのが、キリスト教教育の意義であり、キリスト教大学に働く者の使命であると考えられる。

---

9) 宮田光雄著『若き教師たちへ——希望としての教育——』54 頁。